

# 琉球大学学術リポジトリ

沖縄県系人における沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの検討：

「第6回世界のウチナンチュ大会」に関する基礎的分析と合わせて

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 沖縄県系人, 世界のウチナンチュ大会, 沖縄アイデンティティ, ウチナーネットワーク, 沖縄 キーワード (En): Okinawans, Worldwide Uchinanchu Festival, Okinawan Identity, Uchina Network, Okinawa 作成者: 加藤, 潤三, 前村, 奈央佳, 金城, 宏幸, 野入, 直美, 酒井, アルベルト, 山里, 絹子, グスターボ, メイレレス, 石原, 綾華, Kato, Junzo, Maemura, Naoka, Kinjyo, Hiroyuki, Noiri, Naomi, Alberto, Sakai, Yamazato, Kinuko, Gustavo Meireles, Ishihara Ayaka メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002010072">https://doi.org/10.24564/0002010072</a>

# 沖縄県系人における沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの検討<sup>1)</sup>

## ——「第6回世界のウチナーンチュ大会」に関する基礎的分析と合わせて——

加藤潤三・前村奈央佳・金城宏幸・野入直美・酒井アルベルト・  
山里絹子・グスターボ・メイレス・石原綾華

- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察

キーワード：沖縄県系人，世界のウチナーンチュ大会，沖縄アイデンティティ，ウチナーネットワーク，沖縄

### I. 問題

沖縄における移民の歴史を紐解くと、1900年のハワイへの集団移民に始まる。その後、戦前まで（1937年）に6万7,650人もの人々が海外へと「雄飛」していった。この出移民数は広島県に次いで2番目に多く、1940年時点における出移民在留者率（現住人口に対する海外在留者数の比率）は全国で最も高い9.97%であり、実に県民の10人に1人が海外に在留していた（石川, 2005）。移民地としては、ハワイ、アメリカ本土、南米、南方など世界中に広がっていったが、当時の移民は、移民地における排日運動や排日法の制定など、その時代の世界情勢や社会状況の影響が色濃く生じていた。第2次世界大戦中は移民の送り出しが中断していたが、戦後の1948年に南米を中心に移民が再開、その後は日本の高度経済成長期や沖縄の本土復帰などもあり、移民は年々減少し、1992年には送り出し業務を取り扱う国際協力事業団沖縄支部も廃止された。

石川（2005）は、沖縄における出移民要因として、人口過剰による経済的要因、移民啓蒙家および先駆者の出現、共同体規制の崩壊、社会組織、徴兵忌避があるとしている。また福井（2003）は、これらの要因以外にも、琉球王国の時代より海外交易に馴染んできた歴史、県による移民政策、過酷な自然などを挙げている。このように移民の人々は、様々な要因、理由によって海外に渡っていったが、約100年にわたる歴史の中で、彼／彼女らは移民先の社会に適応し、その構成員として現地社会に貢献していった。またそれと同時に、貧しい県経済を救った送金、戦災沖縄への復興支援など、沖縄県に果たした貢献も図り知れない（沖縄県立総合教育センター, 2017）。そして世代を広げながら、今や海外にいる沖縄県系人は41万5千人（沖縄県交流推進課による2016年度推計（第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会, 2017））いるとされている。海外日系人全体が約380万人いる（海外日系人協会, 2017）ことから考えると、沖縄系が占める割合（約11%）がいかに多いかがわかる。

このような歴史的経緯から、沖縄は「移民県」とも呼ばれる。現状としては、上述のよ

うに送り出し業務を扱う支部も廃止されるなど、出移民そのものは過去の歴史の現象になったが、集団として歩んだディアスポラ<sup>2)</sup>の軌跡は、海外のウチナンチュ・コミュニティという実態となって現在に至っている(金城, 2007)。事実、沖縄県では、これら海外のウチナンチュを県にとっての人的財産として位置づけ、沖縄21世紀ビジョンにおいても基本的課題の1つ(国際交流と共生のネットワークづくり)として掲げられている(沖縄県, 2010)。

この移民母県沖縄と海外の県系人を結ぶ流れは、1980年代より展開された県内メディアによる影響が大きい(例えば琉球新報社による新聞連載や沖縄テレビによる『沖縄発われら地球人』や『世界ウチナンチュ紀行』など)。こうした「世界のウチナンチュ」に対する意識や関心が盛り上がりを見せる中、沖縄県政の施策と、移民1世の故郷への想いと2世・3世などのルーツ探しを熱望する声、そして沖縄県民の誇りとロマンを将来に見出したいという願いが交差する形で「世界のウチナンチュ大会」が開催されるようになった(金城, 2005; 2007)。第1回大会は1990年に開催され、以降は5年に一度、母県である沖縄で開催されている。大会の主要な目的は、「世界各地に居住している県系人、県人会等とのネットワークの構築を図り、我が国の南における国際交流拠点の形成を推進する」ことであるが、これまでに6度の大会が催される中で、目的も広がりを見せ、参加者(特に海外参加者)も増加していつている(表1)。

大会ごとの目的について詳述すると、第1・2回大会では、ウチナンチュの人的ネットワークを確立し、国際交流ネットワークへと発展、拡大させること、第3・4・5回大会では、移民の歴史を経た世代交代の中で、次世代へ沖縄アイデンティティやウチナーネットワークを継承していくことが目的として掲げられた。そして本研究の対象となる第6回大会では、これまでと同様ウチナーネットワークの発展・拡大、沖縄アイデンティティの継承とともに、沖縄独自のソフトパワー(文化や風土、歴史など)の活用など、より実利的な目的も謳われた。

大会による実際的な成果としては、第1回大会では「ウチナー民間大使制度」の発足、第2回大会では国際的な経済ネットワークであるWUB(Worldwide Uchinanchu Business Association)設立の刺激となった。第3回大会では「ジュニアスタディーツアー」が、第4回大会では「一校一国運動」がスタートし、ホストファミリーバンク構想が発表された(金城, 2008)。そして第5回大会では、この大会を機に世界若者ウチナンチュ連合会(WYUA)が発足し、大会の翌年から毎年海外で「世界若者ウチナンチュ大会」が開催されている。つまり、大会の主目的となっているウチナーネットワークの発展、沖縄アイデンティティの次世代への継承が、具体的な活動として結実しているのである。そして第6回大会においては、「世界のウチナンチュの日(10月30日)」の制定が宣言されるなど、“世界のウチナンチュ”が沖縄を象徴する一つの表象として、沖縄県民、県系人に受け入れられるまでになった。

このような成果および、過去の第4回・第5回大会において実施された調査結果より、「世界のウチナンチュ大会」が、国境を越えた絆(越境的ネットワーク)を強化しつつ、ウチナンチュとしてのアイデンティティを醸成するインキュベーター(incubator)の役割を果たすこと(金城, 2008)、また野入(2012)も、大会をめぐる行為も海外参加者のアイデンティティを構築していくことに寄与することを示唆している。

沖縄県系人における沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの検討  
 ——「第6回世界のウチナーンチュ大会」に関する基礎的分析と合わせて——

(加藤潤三・前村奈央佳・金城宏幸・野入直美・酒井アルベルト・山里絹子・グスターボ メイレレス・石原綾華)

表1 世界のウチナーンチュ大会（第1回～第6回）の概要

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
キャッチフレーズ サブキャッチ	「世界のウチナーンチュがやってきた!!」 「カチャーシーで、心はひとつ」	「海を越え、言葉を超えて」 Now is the time for we Uchinanchu to work together for a deeper understanding	「未来—ちゅら夢 心にのせて」	「ひろがるチムグクル つなげるチムチュラサ」	「ちゅら島の魂 響け 未来まで」	「ウチナーの躍動・感動 世界へ響け!!」
開催年月	1990年 8月23日(木) ～26日(日)	1995年 11月16日(木) ～19日(日)	2001年 11月1日(木) ～4日(日)  2000年に沖縄サミットがあったため、開催年度がずらされた	2006年 10月12日(木) ～15日(日)	2011年 10月13日(木) ～16日(日)	2016年 10月26日(木) ～30日(日)
参加者数	海外：約2,400人 入場者：47万人	海外：約3,400人 入場者：52万人	海外：約4,000人 入場者：27万人	海外：約4,400人 入場者：32万人	海外：約5,300人 入場者：42万人	海外：約7,400人 入場者：43万人
開催の目的等	「世界のウチナーンチュネットワーク」の構築。世界に雄飛し、活躍しているウチナーンチュは沖縄の貴重な人的資源である。これらの財産を経済、文化、学術等の各分野において、本県を要として結びつけ、有機的に機能させるためのネットワークを確立する。	世界各地に在住するウチナーンチュ等、本県との関係者を全世界的なネットワークで結び、経済、芸能等の各分野において、人的・物的交流を促進、さらに一層強力に進展させ、双方の社会・経済の発展や活性化に資するとともに、我が国の「南における国際交流」を目指す。	世界各地で活躍するウチナーンチュを中心とする人的ネットワークを拡大発展させ、「世界の架け橋」を構築し、経済等あらゆる分野にわたる持続的な交流を促進し、相互の発展と活性化に寄与するとともに、新たな世紀を迎え、本県が国際交流の拠点として飛躍することを目指す。	移住者世代の功績を踏まえ、ウチナーネットワークを担う次世代の育成を図る大会とし、世界に広がるウチナーネットワークの継承さらなる深化・拡充を目指す。	ウチナーネットワークを持続的に発展させるとともに、世界に向けた新たなネットワークの展開を目指し、「沖縄21世紀ビジョン」に謳われる「世界に開かれた交流と共生の島」の実現に資する。	ウチナーネットワークを持続的に継承、発展させるとともに、沖縄独自のソフトパワーを国内外に発信し、その魅力と可能性を活用して沖縄の未来を切り開いていくことを目指す。

資料：第6回世界のウチナーンチュ大会公式HP および大会報告書より作成。

ただし、例えばネットワークの発展・強化ということについては、参加者の増加傾向や上述のようなネットワークを深化させるようなプロジェクトの創出、またはアンケートにおける一部の回答（例えば、「世界のウチナーンチュとの交流が深まった」や「ビジネス交流が促進された」という問いに対する有無）によって導き出された結論であり、実際的に大会に参加した個人が、この大会を通じてどの程度ウチナーンチュ同士のネットワークを構築、拡大させていったかということについては実証的に明らかにされていない。

また、沖縄アイデンティティの継承に関しては、過去大会（第5回大会）の調査（野入、2012）において、沖縄県系人の沖縄アイデンティティが極めて高く<sup>3)</sup>、この傾向は1世だけでなく2世、3世など世代を超えて高いことが示されている。しかし、前回大会からさらに時間が経ち、世代も4世、5世へと広がっていく中、これらの世代にまで沖縄アイデンティティは継承されているのであろうか。また沖縄県系人のアイデンティティを考える際、沖縄アイデンティティのみを捉えるだけでは十分とは言えない。なぜなら、県系人の人々にとって、日常生活の場は沖縄ではなく移住地（現住地）にあるのであり、また多くの2世以降の人々にとって、自らの生を受けた場所は沖縄ではなく移住地にある。つまり、県系人の人々は沖縄と移住地双方に対するエスニック・アイデンティティを抱え

ている（例えば辻本, 1998）のであり、その一方のみを論じるだけでは彼／彼女らのアイデンティティを正確に捉えられているとは言えない。相対的な比較の中で、彼／彼女らにとっての沖縄アイデンティティはどのようなものなのかを明らかにすることが重要であろう。また比較という点で言うと、県系人内だけでなく、現在沖縄に居住する沖縄県民との比較なども必要である。

以上より、本研究では沖縄県系人の沖縄アイデンティティについて、沖縄県民と比較するとともに、移住地に対するアイデンティティとの相対的な対比の中で、世代間による相違について明らかにしたい。また、ウチナーネットワークの発展・拡大について、大会参加者個人が海外参加者・県外参加者・県内参加者それぞれとどれほど大会を通じてネットワークを構築したのか、その人数から検討を行いたい。これらの目的を検討することにより、県系人に関する学術的な知見を得るだけでなく、大会の効果の検証にも寄与するものであり、社会実践的な意義も果たせるものと考えられる。

なお本研究は、第4回大会（研究代表者：金城宏幸）および第5回大会（研究代表者：町田宗博）に引き続いて行われた調査である。調査・研究の継続性を考えた場合、大会に関する基礎的な分析を行い、その結果を示すことは資料的な価値として重要である。そこで本研究は、上記の目的の検証に先立ち、大会参加者や大会評価に関する結果について記述する。

## II. 方法

### 1. 「第6回世界のウチナーンチュ大会」の概要

2016年10月27～30日にかけて、沖縄県奥武山公園（沖縄セルラースタジアム）を中心に開催された。海外からの参加者は約7,400名と過去最多であり、大会期間中延べ人数として43万人が参加した。第6回大会の目的は、「ウチナーネットワークを持続的に継承、発展させるとともに、沖縄独自のソフトパワーを国内外に発信し、その魅力と可能性を活用して沖縄の未来を切り開いていくことを目指す」というものであった。大会期間中は、公演やシンポジウム、文化交流・体験、スポーツ、市町村・交流団体歓迎会など様々なイベントが開催され、閉会式において10月30日を「世界のウチナーンチュの日」として制定することが宣言された（写真1）。

#### 調査協力者

大会参加者1,119名から回答を得た。ただし、回答に不備のあったもの、および回答の妥当性の観点から15歳未満の参加者の回答を除外（26票）し、最終的な有効回答数は1,093票となった。

### 2. 調査方法

質問紙による調査を実施した。調査は大会2日目から最終日（10月28～30日）の3日間実施した（大会の満足度など、ある程度大会に参加していないと回答できない質問項目があったため、初日は調査を実施しなかった）。

調査票はA3両面であり、日本語・英語・スペイン語・ポルトガル語の4言語で作成した。なお、海外参加者と県外参加者、県内参加者では尋ねる内容に相違があったため、



a. 前夜祭のパレード



b. 開会式



c. 開会式（第6回世界のウチナーンチュ大会写真集より）

### 写真1 第6回世界のウチナーンチュ大会の風景

それぞれ【海外参加者用】（4言語）、【県外参加者用】（日本語）、【県内参加者用】（日本語・英語）を作成した。多言語の調査票を作成する手順として、まず日本語版の調査票を作成し、その後3言語に翻訳した。翻訳は研究チームのうち、それぞれの言語を専門とする研究者に行ってもらった。そして翻訳された調査票に対し、各言語のバイリンガルの人に確認作業と修正を行ってもらい完成させた。また、オンラインでも回答できるよう、Web上でも紙ベースと同様のアンケートフォームを作成し、調査の一部はタブレット（iPad mini）で実施した。調査票（タブレットを含む）の配布および回収は、大会会場に設置したブースおよびその周辺（沖縄県奥武山公園内）にて調査スタッフ<sup>4)</sup>が大会参加者に声掛けをし、協力の意思を示した参加者に調査を依頼した。調査終了後、謝礼としてお茶を渡した。

調査日ごとの質問紙の回収数は表2の通りである。なお、オンラインでの回答も受け付けていたため、大会終了以降も若干ではあるが、データを収集した。言語別での有効回答数は、日本語が746票（68.3%）、英語が236票（21.6%）、スペイン語が66票（6.0%）、ポルトガル語が45票（4.1%）であった。

表2 調査日ごとの回収数

(単位:票)

	海外参加者	県外参加者	県内参加者	計
1日目	100	11	174	285
2日目	52	8	237	297
3日目	227	15	244	486
大会終了以降	2	1	22	25

### 3. 調査票の構成

調査票全体の構成は以下の通りである。項目は多岐にわたるが、本論文では下線部の項目について検討を行った。

- ・参加者の特性(主に沖縄県系人に関するもの)……参加者区分(海外・県外・県内), 沖縄系・移民世代, 出生地, 居住地, 県人会の所属と活動頻度, 来沖回数と大会参加回数
- ・大会に関する評価……参加目的, 大会満足度, 大会の不満点・改善点, 次回大会参加意図, 大会参加に要した諸費用, 海外志向性
- ・ウチナーンチュに関する意識等……アイデンティティ(沖縄・移住地), 沖縄の伝統・文化の実践, ウチナーンチュの条件, 沖縄との関わり方, ウチナーネットワーク(大会を通じて新たに交流が生まれたネットワーク), 沖縄に関する情報接触, 言語能力(しまくうば・日本語), 価値観

沖縄アイデンティティ:過去の大会調査の項目に倣い、「あなたはご自身を「ウチナーンチュ」だと思いませんか」を4件法(「1. 全くそう思わない」～「4. 非常にそう思う」)で測定した。

移住地アイデンティティ:「あなたはご自身を「お住まいの国・地域の人(例えばアメリカ人, ブラジル人など)」だと思いませんか」を同じく4件法で測定した。

ウチナーネットワーク:大会を通じて新たに交流の生まれた人について, その人数を尋ねた(回答形式は自由記述)。なおネットワークの種類として, 海外参加者には「お住まいの地域(州・県)の人」, 「お住まいの国(他州・他県)の人」, 「沖縄県内の人」, 「日本国内の人(沖縄の人を除く)」, 「他国の人」の5種類を, 県外参加者には「お住まいの地域(都道府県)の人」, 「日本国内の人」, 「沖縄県内の人」, 「海外の人」の4種類を, そして県内参加者には「日本国内の人」, 「沖縄県内の人」, 「海外の人」の3種類について尋ねた。

- ・デモグラフィック……年齢, 性別, 国籍, 職業, 学歴, 社会階層意識, 生活満足度

## Ⅲ. 結果

### 1. 「第6回世界のウチナーンチュ大会」に関する基礎的分析

#### 1) 回答者の属性に関する分析

##### ・年齢と性別

回答者全体の平均年齢は44.9歳( $SD = 19.3$ )であった。年齢構成で見ると, 10代から70代以上まで, ほぼ15%前後であった(本研究では15歳未満は除外したため, やや10代が少ない)。回答者は無作為抽出によって選出されていないため, この割合が大会参加

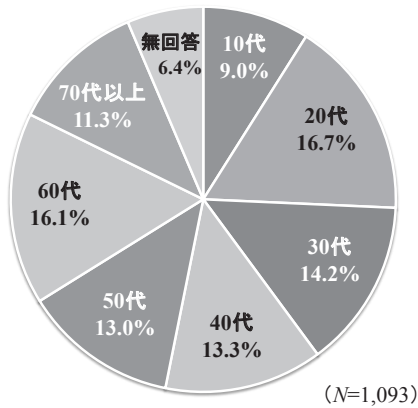


図1 回答者の年齢構成

表3 性別ごとの年齢構成

	男性		女性		計	
	度数	%	度数	%	度数	%
10代	24	6.7	74	11.4	98	9.7
20代	54	15.2	125	19.2	179	17.8
30代	52	14.6	100	15.4	152	15.1
40代	58	16.3	82	12.6	140	13.9
50代	53	14.9	88	13.5	141	14.0
60代	62	17.4	112	17.2	174	17.3
70代以上	53	14.9	70	10.8	123	12.2
計	356	100.0	651	100.0	1,007	100.0

者の実相（実際の全大会参加者における年齢構成の割合）をどれほど正確に反映しているかはわからないものの、データの的には年齢層に関してほぼ均質であると考えられる。なお、前回・前々回の調査（野入, 2008; 2012）において、40歳未満の比較的若い年代の回答者数の推移が検討されているが、前々回調査では40代未満が16.3%、前回調査では36.3%、今回調査では39.9%であった。また20代、30代ごとで見ても、ほぼ前回と同程度（20代16%、30代16%）であった。この結果から、幅広い年代の人々が大会に参加していたと考えられる（図1）。

次に、性別については、男性が359名（32.8%）、女性が659名（60.3%）、不明が75名（6.9%）であった<sup>5)</sup>。相対的に女性が多いものの、前回調査においても女性の割合が61.4%とほぼ同等であったことから、この大会は比較的女性の参加が多いと言えるかもしれない（表3）。

・回答者の職業・社会階層意識

回答者の職業としては、「学生」、「専門的・技術的職業」、「無職（年金生活者を含む）」が多かった（図2）。社会経済的な階層意識として、「あなたが現在お住まいの社会の経済

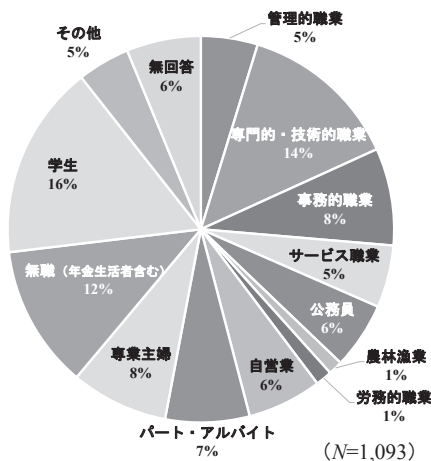


図2 回答者の職業

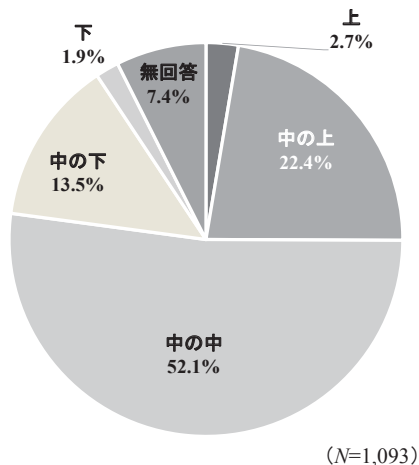


図3 回答者の社会階層意識



的な豊かさを5つの層に分けるとすれば、あなた自身はこの中のどれに入ると思われますか」という項目で尋ねた。最も多かったのは「中の中」であり全体の52.1%を占めた。次いで「中の上」が多く(22.4%)、参加者の社会階層意識は比較的高いことがうかがえる(図3)。

#### ・回答者の参加区分(海外・県外・県内)

回答者が、海外・県外(日本の他県)・県内のいずれから参加したかを区分したのが表4である。なお本調査では、大会参加者を対象としたため、「沖縄に観光に来ていて、たまたま大会に来た」という観光客は調査の除外対象とした。

回答者のうち、海外参加者は381名であり、全回答者の34.9%であった。県外参加者は35名(3.2%)とあまり回答が得られなかった。なお県外参加者のうち、もともと沖縄出身の人は11名であった。県内参加者は677名と最も多く、全体の61.9%を占めた。

なお参加区分ごとの性別比と平均年齢についても表4に示す。性別に関しては、海外参加者では相対的に男性が多く、県内参加者では女性が多かった( $\chi^2(4)=20.44, p<.01$ )。年齢に関しては、海外参加者の平均年齢が52.7歳と、県外および県内参加者よりも高かった( $F(2,1020)=49.90, p<.001$ )。そこで海外参加者の詳細な年齢構成を検討すると、10代が3名(0.9%)、20代が42名(12.2%)、30代が45名(13.1%)、40代が43名(12.5%)、50代が60名(17.4%)、60代が85名(24.7%)、そして70代以上が66名(19.2%)であり、50代以上の人が多かった。

表4 回答者の参加区分

	男性		女性		不明		平均年齢		
	度数	%	度数	%	度数	%			
海外参加者	381	34.9	146	38.3	199	52.2	36	9.4	52.7歳( $SD=17.62$ )
県外参加者	35	3.2	7	1.8	24	68.6	4	11.4	46.6歳( $SD=17.65$ )
県内参加者	677	61.9	206	54.1	436	64.4	35	5.2	40.6歳( $SD=18.86$ )

#### ・海外参加者の属性(沖縄系・移民世代・居住地・県人会の所属)

本研究の主要な調査対象である海外参加者381名の詳細について分析を行った。海外参加者の内、自身が沖縄系であると回答した人は253名(66.4%)であり、家族に沖縄系の人がいるとした人は57名(15.0%)であった。その他が52名(13.6%)いたが、これには「沖縄系の友人に誘われて」や「沖縄系の活動に参加」といった人たちが含まれた(図4)。

次に海外参加者の移民世代について検討を行った<sup>6)</sup>。世代としては移民1世から5世までが参加していた(図5)。各世代の人数比は、1世が39名(15.4%)、2世が66名(26.1%)、3世が81名(32.0%)、4世が25名(9.9%)、5世は2名(0.8%)であった。なお前回および前々回の調査からの海外参加者の世代構成の推移を図6に示す。前回と同様、海外参加者の移民世代の中心は3世であった。ただし、前回からの相違点をあげると1世の割合が減少したのに対し、4世が増加するなど、少しずつ海外からの参加者における世代のシフトも見てとれた。

海外参加者がどの国・地域から参加したかを明らかにするために、現在の居住地(移住地)について分析を行った(表5)。その結果、アメリカが205名(53.8%)と最も多く全

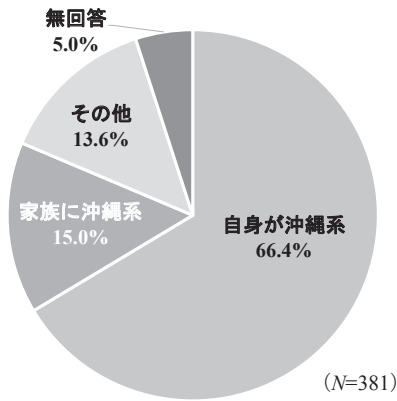


図4 海外参加者の属性（沖縄系か）

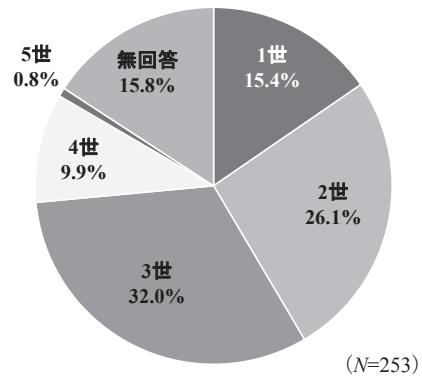


図5 海外参加者の属性（移民世代）

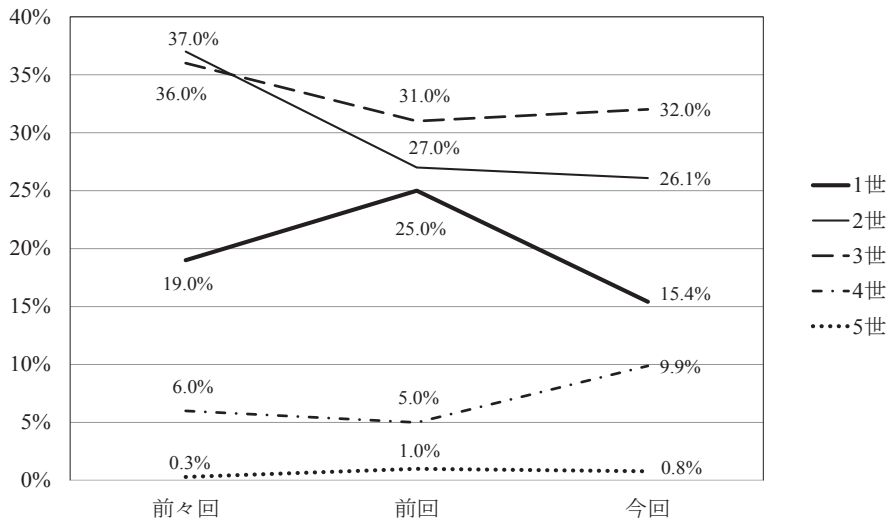


図6 大会ごとの移民世代の推移

体の半数近くを占めた。なおアメリカからの参加者のうちハワイからの参加者は62名であり、アメリカの参加者の約30%を占めた。次いで多かったのはブラジルの41名(10.8%)であり、以下アルゼンチン、ペルーと南米の国が多かった。なお表5中の右側の「大会参加者」は第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局調べの大会参加者数である。本調査と比較すると、ややブラジルの調査対象者数の割合が低いものの(4.6%の差)、おおむね実際の大会参加者の国・地域別の人数比と対応しているものと考えられる。

なお、海外参加者の回答であるにもかかわらず、現居住地として日本を挙げている人たちがいた。これらの人々はもともと海外の県系人で、現在は日本に住んでいるということである。

海外参加者の人々がそれぞれ居住地で県人会に所属しているかを尋ねた。その結果、227名(59.6%)の人が県人会に所属していた(図7-a)。県人会に所属している人々が、

表5 海外参加者の居住地

エリア	国・地域	調査対象者		大会参加者	
		度数	%	度数	%
北米	アメリカ (うちハワイ)	205 (62)	53.8	4,247 (1,861)	58.1
	カナダ	26	6.8	197	2.7
中南米	ブラジル	41	10.8	1,131	15.4
	アルゼンチン	37	9.7	525	7.1
	ペルー	25	6.6	620	8.4
	ボリビア	5	1.3	138	1.9
	メキシコ	2	0.5	23	0.3
アジア	フィリピン	3	0.8	76	1.0
	タイ	2	0.5	15	0.2
	マレーシア	2	0.5	4	0.1
	韓国	2	0.5	3	0.04
	台湾	1	0.3	16	0.2
	中国	1	0.3	39	0.5
ヨーロッパ	イギリス	2	0.5	32	0.4
	スペイン	1	0.3	1	0.01
オセアニア	ニューカレドニア	1	0.3	65	0.9
	日本	17	4.5		
	無回答	8	2.1		
	計	381		7,353	

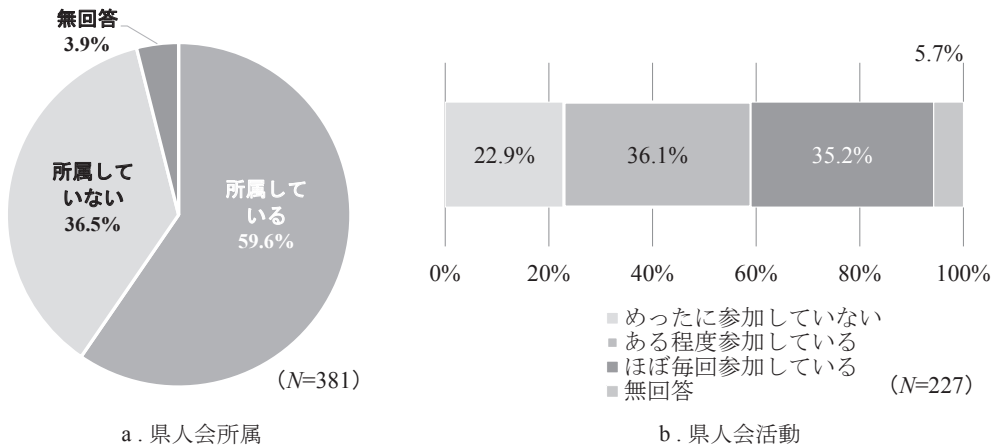


図7 海外参加者の県人会との関わり

どれほど県人会活動に参加しているか尋ねたところ、「めったに参加していない」という人は2割程度、「ある程度参加している(82名, 36.1%)」、「毎回参加している(80名, 35.2%)」という人が7割以上であった(図7-b)。このことから、県人会に所属している人は比較的積極的に県人会に関わっていると考えられる。

## 2) 大会評価に関する分析

### ・参加目的

回答者がどのような目的で大会に参加したのか、その参加目的を尋ねた<sup>7)</sup>。当然ながら、海外参加者と県内参加者とでは目的が異なるため、参加区分ごとに相違を検討した(表6)。

$\chi^2$  検定の結果、有意差が認められた ( $\chi^2(30)=650.94, p<.01$ )。特に顕著な部分に焦点を当てると、海外参加者では、「沖縄の伝統や文化を学ぶため」(15.7%) や、「親戚に会うため」(14.5%), 「自分のルーツを確認するため」(11.4%) などが多かった。県外参加者では、同様に「沖縄の伝統や文化を学ぶため」(13.6%) が多く、また「イベントに参加するため」(18.5%) というのも多かった。県内参加者では、「イベントに参加するため」(18.3%) というのが最も多く、それ以外として「世界の様々な文化と触れ合うため」(14.0%), 「世界のウチナーンチュと交流するため」(12.3%), 「沖縄系移民、世界の県系人について知るため」(10.2%) なども多かった。大きく言って、海外参加者にとっては「沖縄」と触れ合うこと、県内参加者にとっては「世界」と触れ合うことが目的になっていたと考えられる。

表6 回答者の大会参加の目的

参加目的	全体		海外参加者		県外参加者		県内参加者	
	度数	%	度数	%	度数	%	度数	%
自分のルーツを確認するため	141	5.2	112	11.4	3	3.7	26	1.6
世界のウチナーンチュと交流するため	305	11.3	97	9.8	7	8.6	201	12.3
沖縄県民と交流するため	144	5.3	89	9.0	5	6.2	50	3.1
いろんな世代のウチナーンチュと交流するため	93	3.4	20	2.0	3	3.7	70	4.3
沖縄の文化や伝統を学ぶため	272	10.1	155	15.7	11	13.6	106	6.5
世界の様々な文化と触れ合うため	252	9.3	20	2.0	3	3.7	229	14.0
沖縄系移民、世界の県系人について知るため	230	8.5	56	5.7	7	8.6	167	10.2
親戚に会うため	174	6.4	143	14.5	2	2.5	29	1.8
友人・知人に会うため	154	5.7	81	8.2	5	6.2	68	4.2
県人会のメンバーとの交流を深めるため	30	1.1	17	1.7	1	1.2	12	0.7
周り(家族・親戚・友人・県人会など)から誘われて誰かの付き添いで	165	6.1	64	6.5	6	7.4	95	5.8
イベントに参加(出演・鑑賞を含む)するため	381	14.1	66	6.7	15	18.5	299	18.3
仕事や勉強のため	142	5.3	11	1.1	5	6.2	126	7.7
その他	63	2.3	20	2.0	2	2.5	41	2.5
特に目的はない(通りすがりなど)	71	2.6	5	0.5	3	3.7	63	3.9
計	2,701		987		81		1,632	

### ・大会満足度

第6回世界のウチナーンチュ大会に対する全般的な満足度について、4件法(「1.非常に不満」～「4.非常に満足」)で尋ねた。その結果、大会参加者の87%が満足(「非常に満足(553名, 50.6%)」と「やや満足(399名, 36.5%)」の合計)していた(図8-a)。

なお、参加区分別(図8-b)で示すと、海外参加者では「非常に満足」の割合が79.3%と極めて高かった。一方、県内参加者では、全体としての満足度は高いものの、「やや満足している」(51.0%)が多かった( $\chi^2(8) = 209.51, p<.01$ )。以上の結果より、本大会への参加者の満足度は高く、それは特に海外参加者で顕著であることが示された。

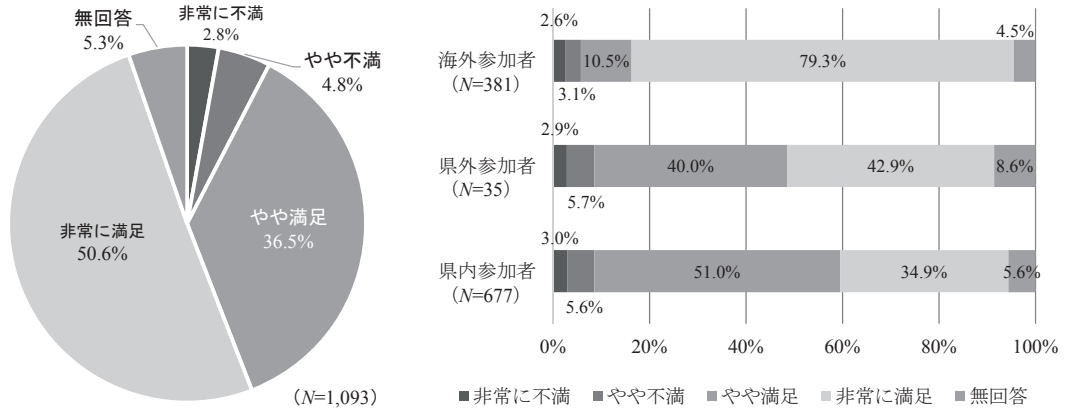


図8 大会満足度 (a (左) : 全体, b (右) : 参加区分別)

・大会への不満点・改善点

大会に対する不満点・改善点として、海外参加者、県外参加者、県内参加者のそれぞれから得られた回答を累積したのが図9である<sup>8)</sup>。そもそも回答者として県内参加者の人数が多いため、総じて県内参加者からの不満・改善の声が多くなる。とはいえ、その中でも「海外のウチナンチュとの交流が少ない」に関しては、県内参加者の21% (141名)が不満・改善点としてこの項目を挙げていた。また「大会の宣伝が不足」をあげる人も多く、それは特に県内参加者から多かった (県内参加者の18% (120名))。一方、海外参加者から不満・改善点として多かったのは、「移動がしにくい」 (海外参加者の12% (44名))、「大会事務局からの情報提供が不足」 (同、10% (38名))であった。

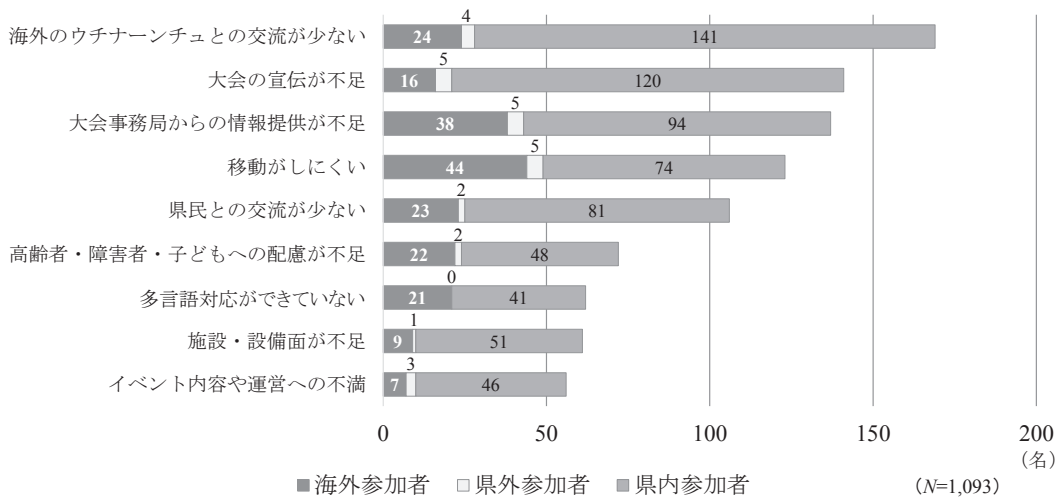


図9 大会の不満点・改善点

## 2. アイデンティティに関する分析

まず沖縄アイデンティティに関して参加区分別で相違があるか検討を行った(図10)。分散分析の結果、参加区分の主効果が認められた( $F(2,1001)=6.75, p<.001, \eta^2_p=.01$ )。Tukey法による多重比較の結果、県外参加者の沖縄アイデンティティが有意に低かった。ただし先述のように、県外参加者のうちもともと沖縄出身の人は11名しかおらず、それ以外の県外参加者にとってこの質問は回答しづらい。また海外参加者についても自身が沖縄系である人とそうでない人が、県内参加者についても沖縄出身の人と移住者(もともと県外出身で沖縄在住)が混在している。

そこで改めて、海外参加者のうち沖縄系の人のみ(沖縄県系人)、また県内参加者のうち沖縄出身の人(沖縄県民(出身者))だけを抜き出し、両者で沖縄アイデンティティの比較を行った。分析の結果、両者では有意差は認められず( $t(763)=-1.52, n.s.$ )、沖縄県民(出身者)も沖縄県系人もともに高い沖縄アイデンティティを保持していることが明らかになった。

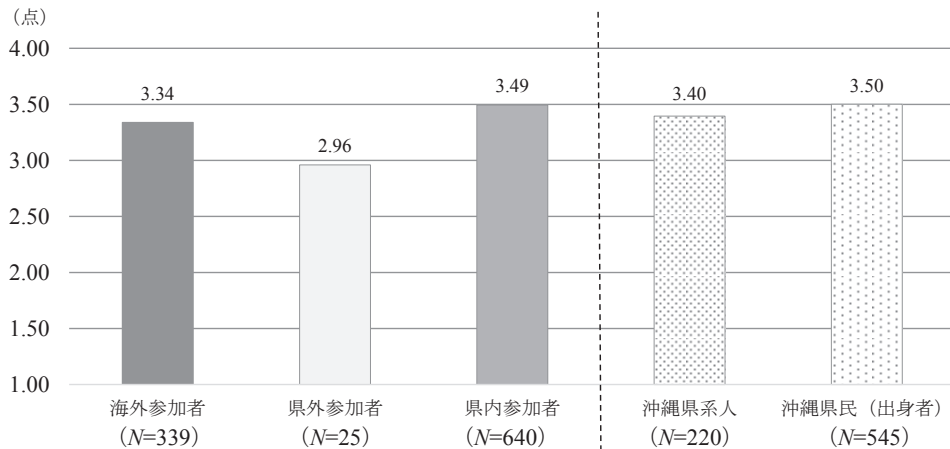


図10 参加区分別の沖縄アイデンティティ

次に、沖縄県系人のアイデンティティについて、世代間による比較を行った<sup>9)</sup>。なおアイデンティティとして、沖縄アイデンティティ<sup>10)</sup>と移住地アイデンティティの双方を取り上げた(図11)。年齢の影響を考慮し、2要因(移民世代×ID)の混合計画による共分散分析を行った結果、移民世代( $F(3,176)=2.17, n.s.$ )およびID( $F(1,176)=1.58, n.s.$ )の主効果はいずれも有意ではなく、移民世代×IDの交互作用が有意であった( $F(3,176)=11.48, p<.001, \eta^2_p=.16$ )。Holm法による下位検定の結果、1世では沖縄アイデンティティと移住地アイデンティティに有意差( $p<.001$ )があり、沖縄アイデンティティの方が高かった。一方、2世以降では沖縄アイデンティティと移住地アイデンティティの間に有意差はなかった。

またアイデンティティごとで見ると、沖縄アイデンティティについては世代間で有意差は認められなかったが、移住地アイデンティティについては1世が2世以降よりも有意に低かった( $p<.01$ )。

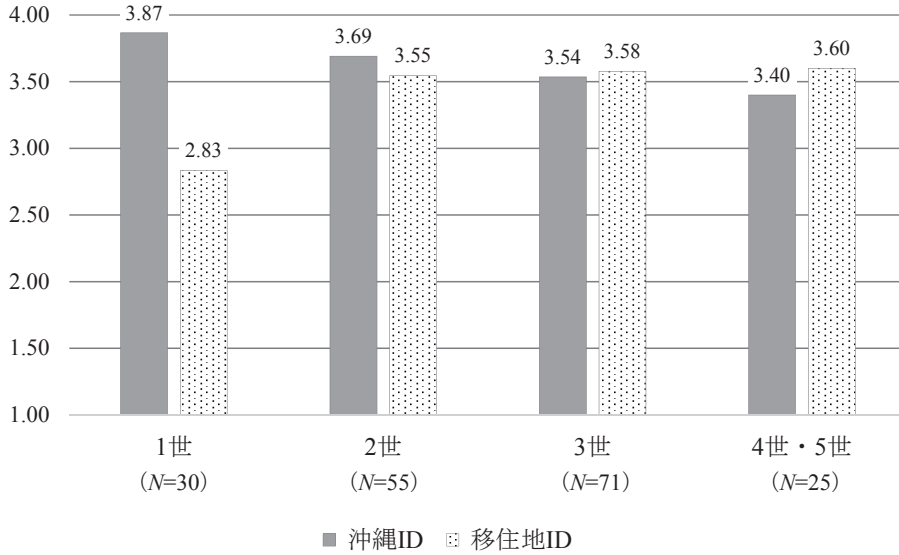


図11 沖縄県系人の移民世代別アイデンティティ

### 3. ウチナーネットワークの分析—大会を通じて生まれた新たなネットワークについて

大会を通じて、新たなウチナーンチュ同士のネットワークが生まれたか、その人数を尋ねた。回答の集計に当たっては、全体の度数の分布の割合から、全くネットワークが生まれなかった「0人」、「1～10人」、「11～30人」、「31～50人」、「50人以上」の5段階に分類しなおした。なお全般的に無回答の割合が多く、これらを含めた%で集計すると大幅に回答が歪んでしまう。ここでは、無回答を除いた有効データによって分析を行った。

参加区分によって尋ねている項目（ウチナーネットワークの種類）が異なるため直接的に比較することが難しい（そのため $\chi^2$ 検定を行っていない）が、全体的な傾向として県内参加者（および県外参加者<sup>11)</sup>）では、いずれのネットワークでも「0人」の割合が最も多く、また人数を回答したとしても「1～10人」と少人数がほとんどであった。一方、海外参加者においては、「0人」という人も30%前後いたが、逆の言い方をすれば、70%近くは新たなウチナーンチュネットワークを築いており、中には30名以上と多くのネットワークを築いた人も少なからずいた。また新たに生まれたウチナーネットワークは、住んでいる地域や国の人だけでなく、沖縄の人、他国の人と多岐にわたっていた（表7）。

## IV. 考察

まず「第6回世界のウチナーンチュ大会」における大会調査の基礎的な分析結果についてまとめる。今回の大会では多様な年代、多様な国からの参加があった。特に海外参加者に焦点を当てると、県内参加者や県外参加者に比べてやや年齢層が高いものの、1世の減少、4世の増加など、大会に参加する移民世代の変容の傾向も見てとることができた。

また大会の評価に関連する項目についてみていくと、参加目的は参加区分で異なっており、海外参加者では「沖縄の伝統や文化を学ぶため」や「親戚に会うため」、「自分のルー

表7 大会を通じて生まれた新たなウチナーンチュネットワーク

参加区分	新たに生まれたウチナーンチュネットワーク		0人	1-10人	11-30人	31-50人	51人-	無回答
海外参加者	住んでいる地域（州・県）の人	度数 %	40 18.3	83 38.1	56 25.7	17 7.8	22 10.1	163 42.8
	住んでいる国（他州・他県）の人	度数 %	57 29.8	76 39.8	30 15.7	13 6.8	15 7.9	190 49.9
	沖縄県内の人	度数 %	62 30.2	90 43.9	36 17.6	5 2.4	12 5.9	176 46.2
	日本国内の人	度数 %	104 55.6	66 35.3	10 5.3	1 0.5	6 3.2	194 50.9
	他国の人	度数 %	72 36.5	83 42.1	27 13.7	7 3.6	8 4.1	184 48.3
県外参加者	住んでいる地域（都道府県）の人	度数 %	11 84.6	2 15.4	0 0	0 0	0 0	22 62.9
	沖縄県内の人	度数 %	10 66.7	5 33.3	0 0	0 0	0 0	20 57.1
	日本国内の人 (住んでいる地域を除く)	度数 %	12 80	3 20	0 0	0 0	0 0	20 57.1
	海外の人	度数 %	10 71.4	4 28.6	0 0	0 0	0 0	21 60.0
	県内参加者	沖縄県内の人	度数 %	290 75.3	69 17.9	14 3.6	2 0.5	10 2.6
日本国内の人		度数 %	314 83.3	51 13.5	8 2.1	1 0.3	3 0.8	300 44.3
海外の人		度数 %	314 79.1	68 17.1	9 2.3	3 0.8	3 0.8	280 41.4

ツを確認するため」など『沖縄』に触れること、県内参加者では「世界の様々な文化と触れ合うため」や「世界のウチナーンチュと交流するため」、「沖縄系移民、世界の県系人について知るため」など『世界』に触れることが主な目的となっていた。大会満足度については全般的に高く、その中でも特に海外参加者の満足度が極めて高いことが示された。一方、大会への不満点・改善点としては、県内参加者より「海外のウチナーンチュとの交流が少ない」こと、また県内参加者・海外参加者より広報・情報不足があげられた。

次に本研究の主目的である沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの分析結果について考察する。

まず、沖縄アイデンティティに関しては、海外・県内・県外の参加区分で見た場合、県外のみ低いという結果になった。ただし、そもそも県外参加者のデータ数が少なく、また県出身者の人数も少なかった。さらに海外参加者でも沖縄系の人とそうでない人、県内参加者でも沖縄出身の人と移住者が混在していた。これらの点を考慮し、改めて沖縄県系人と県出身の沖縄県民とで比較を行ったところ、両者では有意差が認められなかった。具体的な数値で見ると沖縄県系人が3.40 ( $SD=0.93$ )、沖縄県民が3.50 ( $SD=0.84$ )であった。この結果より、沖縄県民だけでなく、県系人も高い沖縄アイデンティティを保持していることがわかる。統計的に見た場合、この数値は天井効果とも考えられるが、例えば琉球新報



社(2017)が実施している県民意識調査でも沖縄県民のアイデンティティの高さを示すデータもあり、この結果は、大会に参加した沖縄県民・沖縄県系人の実際的な沖縄アイデンティティの高さを指し示すものと考えられる。

また、沖縄県系人のアイデンティティについて、沖縄と移住地それぞれに対するアイデンティティの相対的な比較、ならびに世代間での相違について検討したところ、1世では沖縄アイデンティティと移住地アイデンティティに相違が見られ、沖縄アイデンティティの方が高かった。一方、2世以降では両アイデンティティの間に相違は認められなかった。この結果より、沖縄で生まれ、自身が海外に移動した1世においては、自らが選択した移住地よりも生まれ故郷である沖縄に対して、より強いアイデンティティを示すことが明らかになった。無論、1世の移住地へのアイデンティティの得点も中点以上であり、決して低いとは言いきれないものの、2世以降と比べると有意に低かった。その2世以降についてみていくと、沖縄、移住地とも3.5点前後であった。移住地（ないし海外）に生まれ、移住地で育った2世以降の県系人においても、高い沖縄アイデンティティが保持されていること、つまり、沖縄アイデンティティの継承がなされていることが示された。また両アイデンティティの得点がともに高かったことから考えると、2世以降の世代では、自分のルーツにあたる沖縄と、自分の生まれ育った移住地双方に対するアイデンティティが共存していると考えられる。

ただし、沖縄アイデンティティの解釈ならびに収集されたデータについては、一定の注意が必要である。なぜなら、普段沖縄より遠方に暮らす県系人にとって、はるばる大会に来るには多額の費用と時間を要する。これだけのコストを乗り越えやってくること自体、沖縄アイデンティティの高さを示す行為であろう。つまり、世界に41.5万人いる沖縄県系人のうち、大会調査でとらえられた県系人はそのごく一部の、しかも極めて沖縄へのアイデンティティの高い、バイアスのかかったサンプルである可能性がある。また併せて、大会期間中は自分の故郷やルーツである沖縄の人や文化、イベントなどに触れ、アイデンティティが一時的に高揚している可能性もある。もちろん、この世界のウチナーンチュ大会が沖縄アイデンティティを発揚させる装置であることを考えると、この結果はむしろ大会の正の効果を示すものである。しかしより沖縄県系人一般のアイデンティティの傾向を捉えるためには、大会に参加しなかった県系人のデータや普段の移住地における日常的状态でのデータを収集し、結果を比較する必要があるだろう。

次にウチナーネットワークの発展・拡大については、海外参加者と県内参加者で対照的な結果が得られた。まず海外参加者では、70%近くの人々が大会を通じて新たなウチナーネットワークを築いていた。また新たなウチナーネットワークの創出は全般的に生じており、海外参加者においては、それぞれの国・地域と沖縄をつなぐ「母県とのネットワーク」、国同士をつなぐ「越境的なネットワーク」、そして国内や地域内をつなぐ「ローカルなネットワーク」が構築されたと考えられる。一方、県内参加者においては、海外、県外、県内いずれのネットワークにおいても8割近くの人がネットワークを構築できていなかった。では、県内参加者にネットワークを作る意図が欠落していたかと言われればそうではなく、例えば参加目的において、「世界の様々な文化と触れ合うため」や「世界のウチナーンチュと交流するため」、「沖縄系移民、世界の県系人について知るため」など、割合として「世

界」と触れ合うことを志向したものが多かった。また大会への不満点でも県内参加者において「海外のウチナーンチュとの交流が少ない」という意見が多かった。これらの点から考えると、県内の人にとってこの大会はウチナーネットワークを作る機会としては十分に機能しておらず、改善の余地が大きいと考えられる。これまでの大会の実際的な成果として、様々な制度やプロジェクト（特に県系人に向けて）が立ち上げられてきた。しかし何といても、「ウチナーンチュ」というキーワードのもと、海外、県外、県内からこれだけ多くの人々が集まるイベントというのは世界的に見ても稀である（金城, 2016）。だからこそ絶好の機会として（特に参加しやすい県内の人々にとって）、大会参加者間での交流、ネットワークづくりに資するようなプログラム、イベントなどを展開することも重要であるだろう。

以上をまとめると、沖縄県系人における高い沖縄アイデンティティと多様なネットワークの構築が確認され、これまで金城（2008）や野入（2012）が指摘してきた、「世界のウチナーンチュ大会」が越境的ネットワークと沖縄アイデンティティを強化、醸成する機能を果たすという見解が支持されるものとなった。新垣（2017）は、「世界のウチナーンチュ」というディアスポラの共同体は、貧困、戦争、日本人からの差別という受難の歴史の共有、そしてそれを乗り越える相互扶助や寛容の精神が愛着の基盤となっており、その愛着のベースとなる「ホーム」の物語が国境や文化を超えて、マクロな広がりを見せているとしている。この「ホーム」としての沖縄の物語を、時代に合わせながら紡ぎ、世界に県外に、そして県内に発信していく役割が「世界のウチナーンチュ大会」にはあると考えられる。

**付記** 調査にご協力いただいた大会参加者の皆さまに感謝申し上げます。また調査にあたり、共同で実施いただいた第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局の皆さま、調査スタッフとして参加してくれた琉球大学および神戸市外国語大学の学生諸君、そして山下千春さんに謝意を表します。

## 注

- 1) 本研究は文部科学省科学研究費補助金の助成を受けて実施した（基盤研究（C）、課題番号：15K04031、研究代表者：加藤潤三、および若手研究（B）、課題番号：16K17296、研究代表者：前村奈央佳）。また調査にあたっては、第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局と共同で実施した。
- 2) ディアスポラは、もともとユダヤ人の追放・離散をさす概念であったが、今日では国境を越えた人の移動とコミュニティを含意し、ホスト社会のグローバル化を議論する上で重要な概念となっている（安藤, 2005）。
- 3) 具体的には「ご自身を『ウチナーンチュ』だと思いませんか」という質問項目において94.2%が「そう思う（「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計）」と回答した。
- 4) 調査スタッフとして琉球大学の学生24名・神戸市外国語大学の学生19名が参加した。
- 5) 表3の男女の度数と異なるが、年齢未記入のものがいたためである。
- 6) ここでは「自身が沖縄系」と回答した253名が分析の対象である。
- 7) 回答は、表6の各参加目的について、重要なものを3位まで順位をつけて回答してもらった。ただしここでは、順位はふまえず、複数選択的に3つの回答として処理した。なお参加目的の

設定にあたっては、前村（2016）を参考にした。

- 8) 回答者には、図9の9項目について複数回答で答えてもらった。
- 9) 5世が2名しかいなかったため、4世と5世を合わせて分析を行った。
- 10) 図11中の沖縄アイデンティティの得点を平均すると3.62となる。この値は図10中の沖縄県系人の沖縄アイデンティティの得点（3.40）と異なる。点数が異なった理由として、分析上、沖縄アイデンティティと移住地アイデンティティのいずれにも回答した人のみがデータとして有効であり、沖縄アイデンティティしか答えていない人は分析から除外される。つまり回答者数が変化（減少）したため、平均の値が異なるようになってしまった。
- 11) 県外参加者はそもそも数が少ないため分析が困難である。参考として示しておく。

## 文献

- 安藤由美（2005）. 特集：沖縄社会とディアスポラ まえがき, 移民研究, 1, 7-10.
- 新垣 誠（2017）. グローバリゼーション, 国民国家, そして「ホーム」としての沖縄：「世界のウチナーンチュ」という物語の可能性, 沖縄キリスト教学院大学論集, 13, 23-35.
- 第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会（2017）. 『第6回世界のウチナーンチュ大会報告書』.
- 第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会（2017）. 『第6回世界のウチナーンチュ大会写真集（Photograph Collection 2016）』.
- 福井千鶴（2003）. 南米移民と日系社会：日系人のアイデンティティーを中心に, 地域政策研究（高崎経済大学地域政策学会）, 5(3), 35-52.
- 石川友紀（2005）. 沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論, 移民研究, 1, 11-30.
- 海外日系人協会（2017）. 日系人について知ろう <http://www.jadesas.or.jp/aboutnikkei/index.html>（閲覧日 2017年12月1日）
- 金城宏幸（2005）. ディアスポラの記憶としての「移民」と現代沖縄社会, 移民研究, 1, 85-99.
- 金城宏幸（2007）. ディアスポラの記憶としての「世界のウチナーンチュ」, 安藤由美・鈴木規之・野入直美（編）沖縄社会と日系人・外国人・アメリカン：新たな出会いとつながりをめざして, クバプロ, pp.99-119.
- 金城宏幸（2008）. 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（1）：沖縄社会へのインパクト, 移民研究, 4, 83-96.
- 金城宏幸（2016）. 文化共有集団の越境的ネットワークに関する国際比較研究序説：バスク人とウチナーンチュの言語文化をめぐる社会空間の形成, 移民研究, 12, 81-98.
- 前村奈央佳（2016）. 沖縄県系人の“母県に集う”心理に関する研究：「第5回世界のウチナーンチュ大会」への参加動機の分析から, 異文化コミュニケーション, 19, 211-225.
- 野入直美（2008）. 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク（2）：参加者の〈声〉に見るアイデンティティと紐帯の今後, 移民研究, 4, 97-115.
- 野入直美（2012）. 構築される沖縄アイデンティティ：第5回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に, 移民研究, 8, 1-22.
- 沖縄県（2010）. 沖縄21世紀ビジョン [http://www.pref.okinawa.jp/21vision/archives2/okinawa21\\_201004.pdf](http://www.pref.okinawa.jp/21vision/archives2/okinawa21_201004.pdf)（閲覧日 2017年12月1日）
- 沖縄県立総合教育センター（2017）. 琉球文化アーカイブ『移民の世紀』：沖縄移民の100年, <http://rca.open.ed.jp/city-2001/emigration/index.html>（閲覧日 2017年12月1日）

琉球新報社 (2017) . 沖縄県民意識調査報告書 2016, 琉球新報社 .

辻本昌弘 (1998) . 文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程, 社会心理学研究, 14(1), 1-11.

(かとう じゅんぞう・琉球大学法文学部・准教授・社会心理学)

(まえむら なおか・神戸市外国語大学国際関係学科・准教授・社会心理学)

(きんじょう ひろゆき・琉球大学・名誉教授・言語社会学)

(のいり なおみ・琉球大学法文学部・准教授・社会学)

(さかい あるべると・琉球大学法文学部・准教授・社会学)

(やまざと きぬこ・琉球大学法文学部・准教授・アメリカ研究)

(ぐすたーぼ めいれれす・神田外語大学・非常勤講師・国際社会学)

(いしはら あやか・放送大学大学院文化科学研究科・修士課程・社会心理学)

## **A Study on Okinawa Identity and Uchina Network among Okinawans: In Conjunction with Basic Analysis of the “6th Worldwide Uchinanchu Festival”**

**KATO Junzo \*, MAEMURA Naoka \*\*, KINJYO Hiroyuki \*\*\*,  
NOIRI Naomi \*, Alberto SAKAI\*, YAMAZATO Kinuko \*,  
Gustavo MEIRELES\*\*\*\* & ISHIHARA Ayaka\*\*\*\*\***

\*Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus

\*\*Department of International Relations, Kobe-City University of Foreign Studies

\*\*\*Emeritus Professor, University of the Ryukyus

\*\*\*\*Part-time Lecturer, Department of Spanish and Portuguese, Kanda University of International Studies

\*\*\*\*\*Graduate Student, Division of Arts and Sciences, The Open University of Japan

**Keywords:** Okinawans, Worldwide Uchinanchu Festival, Okinawan Identity, Uchina Network, Okinawa

This paper reports the study results from the “6th Worldwide Uchinanchu Festival.” The main purpose of this paper is to (1) conduct a basic analysis of the event and describe its participants and evaluations, (2) compare the Okinawan identity of Okinawan emigrants and their descendants with that of Okinawan citizens while examining the differences between generations in a relative comparison of identities with regard to the land of emigration, and (3) measure to what extent networks were constructed by event participants through the festival with overseas participants, participants from beyond the prefecture, and prefecture participants, and to study the development and expansion of Uchina networks.

The results of the survey on 1,093 event participants revealed there were 381 responses from overseas participants, 35 from participants beyond the prefecture, and 677 from Okinawa prefecture participants. With regard to purpose (1), participants were from various generations and countries and, particularly among overseas participants, a tendency to transform through immigrant generations was observed. With regard to the festival participants' purpose of participating, overseas participants were mainly focused on experiencing "Okinawa," while prefecture participants were mainly focused on experiencing the "world." Generally, participants' satisfaction with the event was high.

The results of analysis on purpose (2) revealed that not only Okinawan citizens, but also Okinawans maintained a strong sense of Okinawan identity. Additionally, investigation into identity among Okinawans revealed that for Issei, Okinawan identity was relatively high, while for Nisei and beyond, Okinawan identity was just as high as the identity they had with their land of emigration. Thus, it can be assumed that while Okinawan identity sustains through generations, for Nisei and beyond, there is a coexistence of identities with both Okinawa, as the land of their roots, and the land of emigration, or where they were born.

Regarding purpose (3), there were contrasting differences between overseas participants and prefecture participants in constructing Uchina networks. Close to 70% of the overseas participants created new networks through the festival and developed various Uchina networks, "motherland networks," "Trans-border networks," and "local networks." On the other hand, close to 80% of prefecture participants were not able to build networks and for them, the event did not sufficiently function as an opportunity to create Uchina networks.